

「教職概論」におけるアクティブ・ラーニングとICT活用

鈴木 円 (現代教育研究所所員 初等教育学科)

はじめに (研究の背景と目的)

我が国の社会・経済面での変化を背景として、教員の資質能力の向上は我が国の最重要課題と位置付けられている。大学教育全般に関して質的転換が求められるなか、教員養成課程の在り方についても質的な変革が求められている。中央教育審議会の2015(平成27)年12月の答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(以下、H27答申と略記)に基づいて、今まさに教職課程コアカリキュラムの検討が進められているところである。このような教職課程に要求される質的改革の在り方を視野に入れつつ、「教職の意義等に関する科目」の授業改革の現状と課題について考察するのが本稿の目的である。

具体的には、昭和女子大学人間社会学部初等教育学科の小学校・幼稚園教員養成課程において、入学当初の1年生が教職課程の最初に学ぶべき「教職の意義等に関する科目」として位置付けられている必修科目「教職概論」について、教職の意義や教員の役割を学生が主体的に把握するためにはどのような授業改革が有効か、アクティブ・ラーニングやICT活用を含めて数年来行ってきた授業改革の実践報告を行うとともに今後の課題を示そうとするものである。

1. 「教職概論」の位置づけ

初等教育学科の「教職概論」は、1年生前期必修の「教職の意義等に関する科目」として位置付けられている。

「教職の意義等に関する科目」は、1997(平成9)年7月の教育職員養成審議会第1次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」において、「教職への志向と一体感の形成に関する科目の新設」が提言されたことを受けて設置されたものである。この答申において、「1年次配当の授業科目としたり、教育の本質・目標等に係る他の「教職に関する科目」の授業と適切に内容調整しつつ有機的に関連を持たせたりするなど、履修方法等に適宜工夫を凝らす必要がある」とされ、「小・中学校等における教職経験が豊富で、特色ある教育活動を展開している教員による指導が効果的である」と考えられるとされていた。教育職員免許法施行規則では、「教職の意義等に関する科目」には、「教職の意義及び教員の役割」「教員の職務内容(研修、服務及び身分保障等を含む。)」 「進路選択に資する各種の機会の提供等」を含むことが必要とされている。

初等教育学科の「教職概論」は、入学当初の1年生が最初に学ぶ教職科目である。1年生は教職への希望を胸に入学してくる。初等教育学科は、入学当初から教職や保育職への希望が明確な者がほとんどであり、教職に対する漠然とした憧れを持っている者が多い。このような学生の特徴を踏まえて、学生に自らの持っている教職イメージを吟味させたいうえで再定義させ、教職の意義、教員の役割について主体的に考え、自らの教職観を確立させるきっかけを与えることが「教職概論」の最も重要な役割であると考えている。

2. 教職をとりまく環境

我が国の社会は大きく変化している。H27答申では、「知識基盤社会の到来と情報通信技術の急速な発展、社会・経済のグローバル化や少子高齢化の進展」さらに、近年の「人工知能の研究やビッグデータの活用等による様々な分野における調査研究手法の開発」により、「一層社会の進歩や変化のスピードは速まる可能性がある」とされ、このような変化に対応できる「質の高い人材育成」のために学校教育の充実が必要で、そのために教育環境を充実させ、「学校が組織として力を発揮できる体制を充実させる」必要があるとされている。その直接の担い手としての教員の資質能力の向上が重要という考え方を示している。

変化していく社会に対応できるような質の高い人材育成のために、教員の資質能力の向上が重要という考え方は首肯できる。しかし、現在の社会情勢の変化が教員に要求する資質能力は、極めて高い専門性を要求するものである。例えば、グローバル化に対応できる英語運用能力、プログラミング教育に対応できるICT利活用の能力など、「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」に限っても、その育成には長い時間と労力がかかる。そのためか、H27答申は、様々な専門性を持った教員以外の人材を学校に関与させる「チーム学校」の考え方を打ち出している。教員には、「多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、教員とこれらの者がチームとして組織的に諸課題に対応するとともに、保護者や地域の力を学校運営に生かしていく」ことが求められている。しかし、この「チーム学校」を実効あるものにするためには、学校に関わる人材の職務と責任の範囲を明確に規定し、統括的にマネジメントできるような学校組織の抜本的改革が前提として必要である。現在の学校の組織体制と教員の職業意識が変わらないまま、この考え方を取り入れると、児童生徒に対する教育責任の分散と希薄化、そして、教員の相対的地位の低下などのデメリットが生じるであろう。もともと初等中等教育の教員は、専門職というにはその資質能力を明示しにくい職業である。高学歴化が進み、教員以外にも教育職員免許保有者が多数存在する社会一般の目から見れば、児童生徒を教えることに専門性が要求されているようには見えていないであろうし、事実、教員でなくとも、子供の扱いや教え方の上手な人は珍しくない。そのため、「チーム学校」の考え方が推進され、学校に教員以外の専門性を持った大人が学校教育に関わるようになると、教員の相対的地位がより低下することが予想されるのである。以上のように考えてみると、H27答申がというような「学校作りのチームの一員として、組織的・協働的に諸課題の解決のために取り組む専門的な力」とは何なのかを明らかにしていくことは、今後の教職を考えるうえで重要な課題となっていくだろう。

これからの教員養成課程に問われているのは、教員にとってどのような資質能力がコアの部分形成しており、そのコアとなる資質能力をどのように育むのかを、社会情勢の変化に応じて見極めていくという課題である。そう考えると、教員養成カリキュラムのなかでの「教職概論」が担うべき役割は、教職課程への入り口として、教職を目指すための学修に対する主体性の確立と教職観の確立への展望を与え、教職を目指す上での自分なりの軸を持たせることにある。学生が教職に就くためには、素朴で漠然とした教職への期待を一度リセットさせ、社会の現実のなかで教員として自分はいかにあるべきかということを主体的に考える姿勢を身につけさせる必要があるのである。

3. 「教職概論」の授業改革

「教職の意義等に関する科目」の内容そのものは、知識伝達型講義の方法を用いても十分伝達可能である。しかし、先に述べたような教職を取り巻く環境を考慮すると、「教職概論」には、実感をもって教職の輪郭を感じ取れるような、知識伝達プラスアルファの要素を含むべきであると考えられる。筆者は2013（平成25）年度以前は、知識伝達型講義の方法を用い、授業中には時折学生に発言を求める程度であった。しかし、この方法では、授業内容は学生にとって記憶すべき知識の集積にすぎず、教職観の自覚につながる生きて働く知識にはなっていないように感じられた。学生に主体的に自らの課題として学修をすすめさせるために、アクティブ・ラーニングを導入し、今後の学校教育の変化を踏まえると、ICTを活用した授業に転換する必要があると判断した。そこで、2014（平成26）年度からアクティブ・ラーニングを取り入れたものに授業方法を転換し、2015（平成27）年度以降、徐々にICTを授業の中に取り入れて、試行錯誤を繰り返しながら、授業改革を行っている。

以下に、現在行っている授業実践の状況について、具体的に説明したい。まず、「教職概論」のシラバスの授業内容の部分を示す。15回の授業を「教職の意義」「教員の役割」「教員の職務内容」「教員生活の実際」という大きな4つのカテゴリーに分けたうえで、各回の授業には、教職を考える上で本質的で、かつ、学生の興味を喚起するような学修課題を設定した。教科書¹は指定しているが、この教科書は自習用として準備学習の際に読んでおくことを求め、授業中には必要箇所を参考程度に見ることがある程度である。

- 第1回 はじめに「なぜ教師になりたいの？」（教師とは何か）
〈準備学習〉ポートフォリオ『善き教師への道』への記入・教科書第1章を参考にして次回テーマについて考察する。
- 第2回 教職の意義「もし、学校がなかったら？」（教えるということ）
〈準備学習〉ポートフォリオ『善き教師への道』への記入・ビデオ講義を視聴し、レポートを作成する。
- 第3回 教職の意義「教え方の上手な先生と人柄のよい先生、どちらがよいか？」（すぐれた教師）
〈準備学習〉教科書第1章及び授業資料を参考にして次回テーマについて考察する。
- 第4回 教職の意義「退職金減額、あなたならどうする？」（教職をめぐる諸問題）
〈準備学習〉教科書第2章及び授業資料を参考にして次回テーマについて考察する。
- 第5回 外部講師による特別講義²「教員を志す方のために」（教科指導・教科外指導）
〈準備学習〉教科書第2章及び授業資料を参考にして次回テーマについて考察する。
- 第6回 教員の役割「誰にも言わないでね。私の秘密、先生だけに話すから」あなたならどうする？」（生徒指導）
〈準備学習〉教科書第2章及び授業資料を参考にして次回テーマについて考察する。
- 第7回 教員の役割「私の学級が崩壊！ あなたならどうする？」（学級経営）
〈準備学習〉教科書第2章及び授業資料を参考にして次回テーマについて考察する。

1 教職問題研究会編（2009）『教職論〔第2版〕教員を志すすべてのひとへ』ミネルヴァ書房。

2 教師として生きるということはどういうことかを学生に印象付けるために、昭和女子大学附属昭和中学校・昭和高等学校で長く教鞭をとられ教頭を務められた佐原正先生を毎年お招きして、「教師をめざす方々のために」という講演を行っていただいている。先生は1924年生まれで、ご自身の従軍体験なども交えながら、戦前戦中戦後の社会や教育の変化をお話しくださっている。

- 第8回 教員の役割「保護者からの突然の苦情、あなたならどうする？」（保護者・地域との関わり）
〈準備学習〉教科書第3章及び授業資料を参考にして次回テーマについて考察する。
- 第9回 教員の役割「ALTとチームティーチング、あなたの英語力は大丈夫？」（教員の種類と職階）
〈準備学習〉教科書第3章及び授業資料を参考にして次回テーマについて考察する。
- 第10回 教員の職務内容「夏休みは何日休めるか？」（教員の資質能力の形成と研修）
〈準備学習〉教科書第3章及び授業資料を参考にして次回テーマについて考察する。
- 第11回 教員の職務内容「教師はSNSを使ってよいか？」（教員の服務規程と身分保障）
〈準備学習〉教科書第4章及び授業資料を参考にして次回テーマについて考察する。
- 第12回 教員生活の実際①「教員はどのように採用されるの？」（教員採用の概要）*進路選択に関する機会提供
〈準備学習〉教科書第4章及び授業資料を参考にして次回テーマについて考察する。
- 第13回 教員生活の実際②「あなたの学級をデザインしよう」（幼稚園・小学校教諭の一日）
〈準備学習〉教科書第3～5章及び授業資料を参考にして次回テーマについて考察する。
- 第14回 教員生活の実際③「20年後のあなたは？」（教職と適性）
〈準備学習〉学修した内容全体を振り返る。
- 第15回 まとめ—これからの時代に求められる教師像

4. 授業の実際

「教職概論」は、1年生約120名を2つのクラスに分け、1クラス約60名程度で授業を行っている。以下、授業の実際について、授業改革の中心であるアクティブ・ラーニングとICT活用の要素について、いくつかの授業の内容を例示しながら、その現状と課題を具体的に報告する。

(1) アクティブ・ラーニングの実際

a. ポートフォリオとフリーディスカッション

第1回目の授業では、「なぜ教師になりたいの？」というテーマで、大学入学当初の学生の希望や考えを引き出し、教職について考えるきっかけをつくるための授業としている。ここで重要な役割をはたすのは、ポートフォリオ『善き教師への道』である。これは、2005（平成17）・2006（平成18）年度に昭和女子大学及び昭和女子大学短期大学部が教員養成GP「短大・大学共同の全人教育に基づく教員養成－児童・生徒と向き合うすばらしさを実感する－」の事業の一環として、作成されたポートフォリオ型のファイルノート³である。このファイルノートには、様々なリーフを用意してあるが、そのなかに、「わたしの目指す理想の先生」というリーフを用意している。表面に、「あなたが今までに出会った「先生」の中で、思い出に残る先生とはどんな先生でしょう？ あなたの理想とする「先生」の備える条件を挙げてみましょう」という指示があり、4つの欄に書き込むようになっている。それぞれの欄は、理想の教師像を「自分に対して」「子どもに対して」「保護者に対して」「同僚の先

3 このファイルノートは、4年次の「教職実践演習」の際に4年間の学びを振り返るためにも使用している。そのため、学生には教職課程の4年間の学びをこのファイルノートに記しておくように求め、履修カルテとしての機能も兼ね備えるように考えられている。

生方に対して」の4つの観点から考えるようになっている。裏面には、「あなたが教職をめざそうと思ったきっかけや理由を書きましょう」とある。ここには、4つの欄が設けてあり、入学当初の「教職概論」で1つの欄を埋めた後、学年が上がるごとに1つずつ欄を埋め、自分の教職に対する思いがどう成長していくかを自分で確認できるようにしている。このポートフォリオを用いることで、まず、教職に対する自分の思いや考えを確認するところから、授業を始めることができる。このリーフへの記入が教員への第一ステップとなるわけである。各自が記入を終えた頃を見計らって、近くの者とのフリートーキングの時間を与え、これから共に過ごしていく仲間たちと自分の教職への想いを共有し、共に教職を目指す同志の士としての絆を形成するようにしている。「教職概論」では、このようにアウトプットを先行させ、その後に講義をするようにしている。講義の主題は、「どうして教師になりたいのか」である。この問への答えを、一人ひとりに答えさせる。大部分の学生が「子供が好きだから」と答える。そこで、「なぜ子供が好きなのか」と重ねて問うと、「かわいいから」と答える学生が多い。ここで、「かわいいから子供が好き」ということについて考えさせる。どの子供もかわいいと言えるのか、かわいいとは思えない子供がいたらどうするのか、どんな子供でも好きだと言えるのかなどの問いを投げかける。すると、学生は考え込んでしまう。この問いは、教職の意義について学生が考えるきっかけとして用いている。そこで、再度近くの者とディスカッションする時間を設け、考えを深めさせる。そしてその後、教職にとって重要な要素である「教育愛」について、一般に好ましい対象を愛するという愛情とは異なるということ、ギリシア哲学におけるフィリアとエロスとアガペーなどの考え方を例に引きながら講義を行うことにしている。講義から始める授業に比べて、学生が主体的に考えるきっかけを与えることができているのではないかと考えている。この最初の問いを印象的だったと後に語る学生も多い。

b. 立場を決めたグループディスカッション

対立する2つの立場から各自に1つの立場を選ばせて、対立する立場を選んだ者との間でグループディスカッションを行う方法は、自らの持つ教職観を自覚させるとともに、教員として判断を迫られる場面を想定して、根拠を持って決断する力を養うことのできる方法である。

第3回「教え方の上手な先生と人柄のよい先生、どちらがよいか？」では、もし、教え方は上手だが人柄が好ましくない先生と、人柄はよいが教え方が上手ではない先生がいた場合、どちらの先生がよいかという問いを立て、立場を決めさせたいうえで、グループディスカッションをさせる。大変雑駁で単純化された問いではあるが、気軽にディスカッションできるメリットがある。まず、付箋紙を渡しておき、まず自分の氏名と考えを簡単に付箋紙に書いて、黒板に付箋紙を貼らせ、自分の意見の位置づけを示させる。その後、立場の違うものとグループディスカッションをさせ、ディスカッションの結果、立場が変わった場合には付箋紙の位置を変えさせる。例年の学生の傾向は、人柄を重視する者がやや多い程度で、ほぼ二つに意見が分かれることが多く、ディスカッションの後でも意見の変わる者は少ない。ディスカッションの後に講義を行う。もし教員ではなく他の専門職、例えば、外科医の場合だったら、手術の上手さと人柄とどちらを優先するかという質問を投げかける。外科医の場合は、圧倒的に手術の上手さを選ぶ者が多い。そして、なぜこのような違いが現れるのかを考えさせ、教職の特質に気づかせ、教職の意義を考えるきっかけを与えることにしている。外科医がその専門領域である手術の力量を重視されるのに対して、教職は教えることの専門家であるにも関わらず、人格

という全人的要素を重視されるということの意味を考えさせたいのである。

第4回「退職金減額、あなたならどうする？」では、2012（平成24）年度に発生した教員の駆け込み退職問題を取り扱っている。退職金を減額する条例改正を受けて、年度末を待たずに「駆け込み退職」する教員が続出したことに対する新聞記事を読ませ、自分が退職時期の迫った教員の立場だったらどうするか、早期退職するか年度末まで務めるかの立場を決めさせ、フリーディスカッションさせる。このような実際に起った問題については取扱いが難しいが、当事者の選択には他者には押し量ることのできない種々の事情や悩みがあったことを十分に理解させたい。授業を進めることにしている。どちらがよいということではなく、自分が当事者だったら、どちらを選択するかということを考えさせる。この問題についても、学生の意見は二分される。フリーディスカッションでお互いの意見を共有した後、一般の企業に勤めていた場合と教員の場合では、判断が異なるかどうかを考えさせる。そして、一般社会では、早期退職が非難の対象とはならず、むしろ退職金減額が退職勧奨にあたる場合もあることを話し、どうして教員の早期退職が非難されたのかを再びディスカッションさせた後、教職に何が求められているのかを自覚させ、聖職論、労働者論、専門職論、省察的実践家論など様々な教職観について講義する。この授業では、自分と異なる様々な意見に触れ、自分の意見と他人の意見が全く異なることを知ることに意義がある。

c. ロールプレイング

教員の仕事を疑似体験する意味でロールプレイングを授業の中に取り入れている。講義だけでは実感を持って理解しがたいことの1つに、教員として児童生徒に対応することの難しさがある。学生は、学年が進めば、実際に教育現場でのボランティア等を通じて実体験を積み、教育実習で実際の教員の仕事を体験することになるが、入学当初の段階で、教員の難しさを疑似体験しておくことは、その後の学修に有効であろうと考えている。

第6回「誰にも言わないでね。私の秘密、先生だけに話すから」あなたならどうする？」では、児童との面談場面を想定し、ペアになって、教員役と児童役に分かれて10分程度のロールプレイングを教員役と児童役の役割を替えて2回行う。その際、あらかじめ用意したプロフィールカードを教員役、児童役それぞれに渡し、カードを相手には見せず、書かれた役割を演ずるようにさせる。以下はプロフィールカードの一例である。

【教員役用】

昭和花子 第4学年女子（担任の観察）

家族は両親のみ。一人っ子。学業優秀だが目立たない子で、いつも表情が硬い。特定のグループには属していないようであり、休み時間などは外で遊ばず図書室などに行くことが多い。時々、服に土がついていたり、汚れていたりするのを見かけることがある。授業中の発言も少ないが、指名されたときなど、小さい声で発言する。その発言に対して、周囲がクスクスと笑うことが最近しばしばある。心配な子どもである。声かけしてみても、「大丈夫です」というばかりで何も言ってくれなかった。ところが、今日、突然、担任のところに来た。

【児童役用】

昭和花子 第4学年女子（本人の状況）

2年生の時から学級の複数の友達に嫌がらせをされている。教科書に落書きをされたり、上履きを隠されたりした。2年生の時に教員に訴えたら、教員がみんなの前で「いじめはいけません」と彼女の名前を出

して、強く叱った。そのせいで、嫌がらせがエスカレートした。3年生の時にクラス替えがあって、嫌がらせをされることがなくなりほっとしていたが、4年生になって、また嫌がらせがはじまった。ずっとがまんしていたが、どんどんひどくなっていく。この前は上履きをトイレの便器の中に捨てられていたし、教科書がずたずたに切られていた。ランドセルにも大きな傷が付いていた。お母さんには心配かけたくないので内緒にしてある。いじめの中心は、2年生のときに同じクラスでまた同じクラスになった鈴木円子^{まるこ}だと思う。担任の先生にだけはわかってもらいたいが、また、2年生の時のようになつたら困る。

ロールプレイングが終わったところで、お互いに配付されたプロフィールカードを見せ合って、フリーディスカッションをさせる。教員の役割、児童の役割をそれぞれ演ずることで、教師役からは、悩みを持つ児童への対応の難しさ、話を聞きだすことの難しさを感じ、児童役からは、教師に話をすることの難しさ、教師が自分の気持ちをわかってくれないもどかしさなどを、実感として感じ取ることができる。生徒指導の場面で、児童とコミュニケーションをとるといふことの重要性とその難しさを自覚させることが本授業のねらいである。

(2) アクティブ・ラーニングの課題

本授業で取り扱っているアクティブ・ラーニングの方法は、学習課題に対する興味を喚起し、学生が教職について実感的に把握し、教職イメージの再構成をはかり、教職の意義や役割を主体的に考えさせるという意味では有効である。しかしながら、以前の知識伝達型講義主体の授業と比較して、知識伝達という面では不十分さが見られる。授業時間中に伝達される知識は量の面からは大幅に減少しており、厳選された部分的知識でもって全体を押し量らせるような授業になっている。そのため、準備学習で学生が自主的に身につけなければならない知識が多くなっている。アクティブ・ラーニングの時間を十分に取つつ知識伝達を充実させることが今後の課題である。一案としては、必読書籍リストの作成とアサインメントの工夫が考えられる。必読書籍リストを設定し、その課題をクリアしなければ授業に参加できないようなシステムがあれば効果が上がると予想される。ただ、そのためには、学生に課題に取り組む時間的余裕を確保しなければならない。そのためには、カリキュラム全体の見直しも視野に入れる必要が出てくるであろう。

(3) ICT活用の実際

a. OCWの活用

シラバス上で、第2回の〈準備学習〉に「ビデオを視聴」と記載しているところが、OCWを活用した授業課題である。通常授業とは別に、OCW (Open Course Ware) を活用して、自学自習させる課題を実験的に取り入れている。使用するOCWは、東京大学のOCWで荻谷剛彦氏の「社会学ワンダーランド (学術俯瞰講義) 第11回 学校という制度」である⁴。この講義は学校制度の歴史の変遷をたどりながら、学校制度の意味を考える講座でたいへん示唆に富む講義である。これを学生に視聴させて、視聴した内容に関する感想レポートを提出させている。この内容そのものを授業で取り上げることはないが、学校制度に対する知見を深めさせるには有効である。このOCWの課題は、後述の

4 http://ocw.u-tokyo.ac.jp/lecture_833/ (検索日：2017年9月30日)

Google Classroomにこの講義のURLをリンクさせてアクセスしやすいようにしておき、レポートもGoogle Classroom経由で提出させる。このOCWの活用に関して、学生からは、内容については、「学校とは何か、知っているようで知らないことや今まで当たり前だと思っていたことについて改めて考え直すきっかけになった」「教育とは何か、教職とは何かを考えるきっかけになった」等の肯定的評価がある反面、「内容が難しかった」「ビデオなので質問もできず、授業でもあまり触れなかったからよくわからないままになってしまった」とする意見もあった。また、「普段ああいっただ動画を見る機会はないし授業では時間的にも見られないからよかった」「なかなかほかの学校の先生の講義を聞ける機会はないので、とてもためになった」と他大学の講義を聞くことについて肯定的意見がある反面、「授業を動画で見るとその場にはいないという疎外感がある」「動画の時間が長くて、まとまった時間がないと視聴するのは難しかった」という問題点も指摘された⁵。OCWの活用は、授業の内容の幅を広げるのに効果的ではあるが、動画視聴のもつ限界や動画で講義を聴くことに対する心理的障壁もあることが示された。この効果と限界を見極めて、動画視聴時間や授業時間内における視聴内容のフォローアップなどを含めて検討する必要がある。

b. Google Classroomの活用

本授業で中心的に用いているGoogle Classroomは、簡易なLMS（Learning Management System）である。Google ドキュメント、Google フォーム等との連携が容易であり、工夫次第で多様な利用方法が考えられる。昭和女子大学ではG Suite for Educationが使用可能で、学生個々に学内メールアドレスが付与されている。Google Classroomへのアクセスは、学内メールアドレスに限定されているので、セキュリティの面で有利である。さらに、Google Classroomでは、他のLMSに比べて機能が限定されているが、そのことが逆に初心者にも使いやすい環境となっている。また、Google Classroomはデバイスを選ばないので、パソコンでもタブレットでもスマートフォンでも閲覧したり、記入したりすることが可能である。以下に具体的な使用方法について述べる。

まず、授業開始前にGoogle Classroomのなかに教職概論クラスを作成する。授業全体のプラットフォームとして用いるので、授業教室、シラバス、授業用資料等をあらかじめ掲載しておく。授業に関係する学生への連絡、個々の学生への連絡にはすべてGoogle Classroomを用いる。

次に、第1回目の授業で、各自の所持しているスマートフォンから、Google Classroomへのクラス登録をさせる⁶。簡単な説明をするだけで、質問も若干は出るが、ほとんどの学生は戸惑うことなく登録を済ませることができる。登録についての質問の多くは、各々のスマートフォンの設定の問題である。なお、本授業は、BYOD（Bring Your Own Device）を基本としているので、授業中にスマートフォンを使用することは制限していない。授業中、気になったことをインターネットなどで調べることはもちろん許容している。また、試験は資料の持ち込み可としているが、スマートフォンの持ち込

5 これらの学生の意見は、Google フォームを用いて受講者に対して2017（平成29）年8月1日～10日に実施した「教職概論最終日アンケート」に寄せられた意見から抜粋したものである。以下、学生の意見は、同アンケートによるものである。

6 初回の授業では、スマートフォンを持っていない学生のために学科所有のiPad miniを数台準備しておいたが、これを利用する学生はいなかった。なお、授業内でのネットワークは、学内の無線Lanを活用するように勧めている。

みも許可している。このあたりは議論の分かれるところであろうが、次世代の情報技術との付き合い方は時と場所を選ばず許される方向に向かうと考え、このような方法をとっている。試験も、800～1,000字程度の論述式の設問にしており、インターネット等を参照したからといって解答に有利になるような問題にはしていないので、今のところ、不都合は生じていない。次に、Google Classroomの主な使用法について、具体的に述べる。

①レポート課題のペーパーレス化

「教職概論」では、大小のレポート課題を課しているが、Google Classroomでレポート課題を提示し、Googleドキュメントでレポートを作成して提出させる方法を取っている。レポート作成に必要な資料についても、Google Classroomに掲載している。学生は、レポートを書き終えたら、〔提出〕をクリックするだけでよく、完全にペーパーレス化されている。学生から提出されたレポートには、コメントや評点をつけることができる。コメントや評点は、学生本人にメールで送信される。さらに、締め切りが近くなっても未提出の場合、自動的に注意喚起のメールが学生に送信される。

従来、紙で提出されていたレポートを、WEB上のやり取りに変更したことで、いろいろな利便性を学生は感じているようである。学生からは、「スマートフォンだといつでもどこでも書くことができる」「レポートを印刷する手間が省ける」「わざわざ学校に提出しに行かなくていいし、忘れることもなくなる」「通学時間にも書くことができるので家が遠くても不利にならない」「普段使っているスマホでレポート提出ができるので他と比べて気が重くなかった」など、手間がかからず心理的な負担感が少ないことが指摘されている。さらに「パソコンよりスマートフォンの方が打つのが簡単」など、パソコンよりもスマートフォンで文章を打つほうが楽だと感じている学生が多い。反面、WEBでの提出は提出した実感に乏しく、「ちゃんと提出できているか不安になる」「機器が壊れたら困る」「データが消失したら困る」等の漠然とした不安感を保つ学生もいる。

②Minute Paperによる意見の共有

ほぼ毎時間の授業の最後にかけるMinute Paperに、Google Classroomの「質問」機能を使っている。この機能は、教師が用意した授業に関する質問に対する回答をGoogle Classroomに入力すると、クラス全体に共有され、学生が相互に意見交換をすることもできる機能である。授業中あるいは授業終了直後に意見共有が可能となり、学生同士がそれぞれの考えから刺激を受けることができる。学生からは、「自分とは異なる考えを聞いて影響を受けられる」「自分が考えてなかった意見を知ることができる」「他の人の意見を知ること、自分の視野が広がる」「ほかの人の意見と自分の意見の相違点について考察することが出来る」等の肯定的評価が得られた反面、「自分の意見を見られたくない」「見られるとわかると素直に書きづらい」「恥ずかしい」など、意見の公開に抵抗感を持つ学生もいた。

(4) ICT活用の課題

ICT活用に関しては、今後ますます重要性を増してくるであろうと思われる。とくに今後は、クラウドを利用した情報共有の手段としての利用、時間と場所を超えたインタラクティブなコミュニケーション手段としての活用が広がっていくものと考えられる。そのことを考えると、ICTを活用するリ

テラシーを習得するとともに、意見表明や意見共有に対する抵抗感をなくしておく必要がある。今後、学校現場ではICT活用がますます盛んになるであろう。教職志望者が、ネットワークコミュニケーションの能力を身に付け、ICTの有用性や可能性と限界、ICT活用の前提となる心理的な障壁の除去の必要性について、自ら体験的に学んでおくことは意味のあることである。

まとめと今後の課題

これまで、「教職概論」の授業改革の実際について、アクティブ・ラーニングとICT活用に焦点をあてて報告してきた。

アクティブ・ラーニングは、教職の意義や役割を主体的に捉えさせ、自らの問題として教職とはいかなる職業かということを考え、自ら教職観を確立していくきっかけを与えるという点で有効な方策である。加えて、アクティブ・ラーニングは、教職志望者が経験しておくべき学習方法としても意味がある。現状では、中等教育段階でのアクティブ・ラーニングの導入には学校差がある。学生に聞いてみても、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の経験の乏しい学生も多い。新学習指導要領ではアクティブ・ラーニングの視点からの「主体的・対話的で深い学び」が目指されている。新学習指導要領下で教壇に立つ可能性の高い教職志望者が、教員養成課程の授業でアクティブ・ラーニングを自ら実践することを通して、主体的で対話的な学びとは何か、深い学びとは何かを感じ取り、自らアクティブ・ラーニングをマネジメントできるようになっておくことは、必須の課題と言ってもよいのである。アクティブ・ラーニングは万能の授業方法ではない。その欠点や限界も自らが経験してはじめて理解できるところがあるであろう。

一方、ICT活用に関しては、現状では、「教職概論」の学習効果を高めるという意味あいよりも、多様な可能性を模索している段階である。学生も現段階では、学修効果よりも利便性に着目する傾向が強い。「教職概論」においては、ICTは本来、時と場所を選ばないコミュニケーションツールとして活用されることに意味があり、例えば、OCWやMOOCsで国内外他大学の講義を聴いて知見を深めることができたり、LMSを通して学修者相互がコミュニケーションをはかったりしながら学修内容を深化させていくということができることに意味がある。その面での授業利用を工夫することが今後の課題となるであろう。また、アクティブ・ラーニング同様、中等教育段階でのICT活用については、学校差が大きく、高校の「情報」の授業以外、学校ではほとんどICTを利用したことがないという学生も多い。一方で、スマートフォンなどの個人用デバイスを学生は所有しており、日常的にはICTを学修以外の様々な面で利用しているのが実情である。ICTに関しては、学校と日常生活のICT利用度が乖離している状態である。日常的に使用しているデバイスを学修のためのコミュニケーションツールに転換していくことで、学生のICT活用の有効性がより広がっていくと現時点では考えている。

参考文献

- Bonwell, C. C., & Eison, J. A. (1991) *Active Learning: Creating Excitement in the Classroom*. 1991 Ashe-Eric Higher Education Reports. ERIC Clearinghouse on Higher Education.
- 中央教育審議会 (2015) 「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申)」.
- 藤原幸男 (2002) 「「教職の意義等に関する科目」の実践的研究—教職像・教職志望を中心に」『琉球大学教育学部紀要』(60), 143-153.
- 日高和美 (2006) 「「教職の意義等に関する科目」をめぐる今日的動向」『教育経営学研究紀要』(9), 51-57.
- Korthagen, F. A., Kessels, J., Koster, B., Lagerwerf, B., & Wubbels, T (2001) *Linking practice and theory: The pedagogy of realistic teacher education*. Routledge.
- 教育職員養成審議会 (1997) 「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について (第一次答申)」.
- 松下佳代編著 (2015) 『ディープ・アクティブ・ラーニング』 勁草書房.
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブ・ラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂.
- 中西仁 (2014) 「「教職概論」における教職課程入門の試み：学校・教職の現状を語ることを通して」『同志社大学教職課程年報』(4), 37-48.
- 下地秀樹 (2017) 「アクティブ・ラーニング, ディープ・ラーニング, ディープ・アクティブ・ラーニング：講義型教職科目 (「教育原論」, 「教育制度論・教育課程論」, 「教職概論」) を考える (アクティブ・ラーニングをめぐる)」『教職研究』(29), 159-169.

